

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成21年12月5日発行(毎月5日1回発行)
第49巻12月号(通巻466号)

風土



12

木枯一号

神蔵

器

たてがみの木枯一号浅間晴れ

落葉松の霧氷すなはち散華かな

拾ひたるドンダリに根の二分三分

畳に撒く離山房より照紅葉

これやこの秘すれば恋のうめもどき

さくら紅葉いろは紅葉と霧襖

姫街道

コスモスや髭の奴の槍の行く

みすずかる青き胡桃に双体神

くわりん落つ大僧正の遷化以後

生誕より死のなつかしき新松子

血を殖やすため食ふ冬至南瓜かな

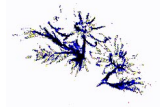
「風土」五十周年記念祝賀会

霞むこと悟り十月さくらかな



竹間集

同人作品



花野

塩田博久

保養所に木の香あたらしけらつつき
SLの淡き煙や秋晴るる
寝ころべば空往く如し大花野
鴟晴や窓に物干す長屋門
雁渡し新テレビ塔日々高く
秋刀魚焼く妻に大根おろすわれ
雀化^{習作}して蛤となるマルセーユ

生身魂

代田青鳥

角張りし後ポケット秋暑し
音伏せて棒のやうなる那智の滝
積み上げてロシア丸太や秋茜
狂ほしく秋の風鈴鳴りにけり
疎開地に九年の月日彼岸花
カレーライス箸で片寄す晩夏光
座つても立つても丸き生身魂

無言館

関根洋子

秋蝉のこゑの染み入る未完の絵
熟睡児の素描かなかなしぐれかな
ちちははの魂となり小鳥来る
眉太き自画像鴟の高音かな
蓼の花無言の祖母^{ばば}を描き征く
雁渡し開ける人なき絵の具箱
桔梗や棺にあらぬ無言館

猿 梨

田中佐知子

宮内に住まふ二軒家秋簾
ひとりの夜鈴虫の音のすきとほる
姥捨山（姥捨山）に踏み分けみちや草もみぢ
秋潮の立ち上がりたる鯨塚
零余子落つ火入れ真近き登り窯
打ちたての蕎麦の歯ごたへ天高し
猿梨や木地師の村に深く入り

秋風の

南 うみを

子規の忌の枝豆口に飛ばすなり
粉殻（粉殻）をもらひに枝豆を抱へ
干し草にほのかな湿り十七夜
来客は膝をくづさず鉦叩
紫蘇の実をほぐせばさらふ秋の風
紙になる前の澱みやいわし雲
秋風や土あらはなるけものみち

迢空忌

島谷征良

ゆつくりと鳴き出しにけり秋の蝉
風が来て風船かづら少し浮く
菊うかべ重九のワイン飲み干しぬ
鶏頭をしたたか叩き雨あがる
迢空忌この日はわれも歌つくる
秋の蚊や机の下の一天地
一つ終へ次の踊へ列正す

木き子の秋

大竹淑子

野葡萄や四圍の山稜雲生みて
ひやひやと草を潜れる水の音
猪道や雲の上なる口を仰ぎ
茨の実赤し小鳥の名をしらず
鴟（鴟）一声水嵩減りし高原湖
嫁菜咲く自給自足といふ暮らし
十割蕎麦打つて山野の秋ふかむ

ハーバー

— 関根 洋子 —

宮内庁管轄領の秋蚊かな
秋蝶の後につきたる臨御橋
海原へ羽を向けたる銀ヤンマ
鰯飛ぶや人の世界を覗きたく
うらうらと赤とんぼ乗る舳網
鰯雲人の名前の漁船かな
秋うらら漁網つくろふ太き指
ハーバーに色なき風と黒猫と
かなかなや葉山に残るポンプ井戸
潮焼けの表札奥の松手入

山河集

同人作品



神蔵
器選

沖島

百軒に百の漁船や鱚雲
賜日和上陸の島傾けて
爽やかや風の過ぎゆく方を向き
みづうみにつづく花野の観覧車
帽放り上げ放り上げ花野ゆく

橋添やよひ

稲光鉄路にアンナカレーニナ

豎山道助

不器用に柿剥く子規の忌なりけり
国境は道の真ん中秋麗

月光に死にゆく力もらひけり
落穂拾ふ昔安保の闘士なり

とある夜の虫入れ替る勝手口
校庭をめぐりて燕帰りけり

浅田光代

零余子蔓肥後もつこすを母に持ち
水引や次の段だけ見てのぼる
机上まろく使ひこなして夜の秋

落谷絹代

BGMは籠の鈴虫日記書く
五つ鳴く鈴虫一糸乱れなし
くらくらと風を振るや鳥威
画展果て成し得て一つ星月夜
色草を賞でて業平塚の前

柿沼罌子

保育所のとろ箱の田に鳥威
無花果や路地に現役手押し井戸
吊草に長短のあり敬老日
山手線半周釣瓶落しかな
枝豆を平らに冷まし夕支度

◇特別作品◇(抄)

吾が町瀬戸

瀬戸 雄二

終戦忌陶貨と小さき陶の弾
雁渡る磁祖の民吉作花瓶
陶祖磁祖あり産土の秋祭
拝殿の織部瓦の露けしや
水澄むや瀬戸の陶祖は藤四郎
釣瓶落し老舗商標剥落す
陶器の火おとろへし町秋暗し
鉦叩薪積まるる窯の脇
しばられし茶碗どんぶり土間冷ゆる
秋晴れや陶のからくり時計鳴る

風土独語／神蔵器



百軒に百の漁船や鱒雲

橋添やよひ

句会に投句された時は「沖島」の前書があったので復活させた。前書があつて生きる句だからである。

沖ノ島は紀伊水道や長崎半島の先、沖之島天主堂で知られる沖之島など島国の日本には「沖」の名の付く島はかなり多くあるのではないかと思われるのであるが、さて「百軒に百の漁船」とは、何処の島なのか句会の時には解らなかつた。思いきつて尋ねてみると、当日は欠席投句であつたが、句稿を預かつた人の説明で、琵琶湖とのことであつた。

琵琶湖と聞いて二度びっくり、私は琵琶湖には、いくつか島があることは承知していたが、一番大きい島は竹生島と思つていた。宝蔵寺・都久夫須麻神社が信仰と観光の中心をなし・能や長唄「今様竹生島」などでも知られる。しかし全国からの観光客は多いが、土着の漁師などは見当たらなかつた。

句会のあつたその夜半、午前二時頃に眼が覚め、眠れぬまま地窓を開き、資料などを当たつた。以下はその結果である。

沖島は琵琶湖に浮かぶ一番大きな島で、東西約二・五キロ、南北約一キロ（因みに竹生島は周囲二キロ）、人口は三百七十人、最も多かつた時は五百人とのこと。JR近江八幡駅からバスに乗

り、堀川港から渡船十分で沖島港に着く。島の主な産業は漁業、二二〇メートルの高い山があり、従って平地は少なく、人家は港近くに集中し、主な交通手段は三輪自動車、船はこの島の住人の足で一家に一隻、マイカーならぬマイボートがある。

おいつしま守りの神やいますらん

波もさわがぬわらわえの浦

紫式部

稲光鉄路にアンナ・カレーニナ

豎山 道助

アンナ・カレーニナは、トルストイの『戦争と平和』に勝るとも劣らない世界的長編小説である。女主人公のアンナは、夫や子をおいて、青年貴族ウロンスキーと熱烈な恋に走る。アンナは自分の望みのためには情熱のおもむくまますべてを犠牲にする。神も社会も人類も彼女にとっては関心外。その結果アンナは社交界からも孤立し、恋人からも次第に冷たくされ最後は絶望して鉄道自殺する。

この小説ではアンナとウロンスキーを表の筋とすれば、それにそつて、地主のレーピンとその妻キティーの生活が描かれている。レーピンは、人は自分のためではなく、他人のために「真理」のため、神のために生きねばならない。自己犠牲こそ真の愛であるとす。アンナの生き方と対照的、正反対の生き方である。

掲出句は俳句だから許される省略の限界点。稲光に映発した鉄路は一瞬、青白く凄々たる光を放つ。（以下略）

風土集



神蔵器選

愛用の子規の栞や瀬祭忌 川崎

古川よし子

読本の「サイタサイタ」や賢治の忌

欠け残る宝篋印塔虫の声

曼珠沙華百万本も交らず

弟の姉に負けじと子規忌かな

赤とんぼ増えきて音のなかりけり 高槻

浅田 光代

秋天の一滴となる淡路島

国生みの島よりなだれ葛の花

葛あらし活断層のうへ歩く

秋燕真白きころありにけり

酔芙蓉グラスワインにカントオーネ 川崎

松田 延子

とき放つ心の旅やうろこ雲

秘めごとの一つも欲しき酔芙蓉

学食は十七階や鯛雲

柿喰めば子規思ふなり泣けるなり

小面の正面にゐる良夜かな 横浜

中村 洋子

秋蝶と入るや礫山美術館

合掌の梁の手斧目良夜かな

木と語り向き合ふ木地師草田男忌

シテの出にすこし間のある良夜かな

石段は地中に続くきりぎりす 川崎

北島 和装

延命の黒き卵や秋深む

美容師のカット練習夜半の秋

掌は水汲むかたち棗受く

仰け反りて銀河を胸に流しけり

身に沁むや島の岩屋に墓を寄せ 大和

落合 絹代

迎火に逝かるや玉とせる縁

零さじと人にゆづるも萩の径

左岸来てこれより右岸曼珠沙華

翼張る松の断崖天高し